Well-being×Tourism クロノロジカルリサーチ

執筆者

立命館大学院博士課程前期
寺﨑新一郎研究室
今村あさぎ

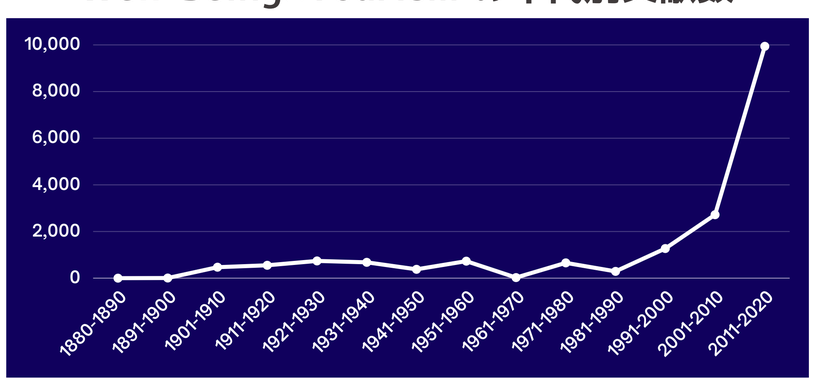
本研究ではウェルビーイングとツーリズムに関する研究の変遷を明らかにするため、その端緒である1890年代まで遡り、文献調査を実施した。初期の研究においてウェルビーイングとツーリズムが関連づけて議論されている例は極めて少なく、本格的な議論の幕開けは1930年代まで待つことになる。
本発表では1930年代を起点として、2010年代までのウェルビーイングの対象や在り方の変遷について、文献レビューに基づいた分析結果を報告する。

1 Well-beingとは

ウェルビーイングとはWell（よい）とBeing（状態）からなる言葉である。世界保健機関（WHO）では、ウェルビーイングのことを「個人や社会のよい状態。健康と同じように日常生活の一要素であり、社会的、経済的、環境的な状況によって決定される」と紹介している。
QOL（Quality of life）＝Well-beingとして扱うとらえ方をUysal（2016）は提言しており、本研究でもこれに倣う。
（出典）https://www.benesse.co.jp/well-being/about/#:~:text=1

2 研究の目的と独自性

Well-Being×Tourism の年代別文献数



これだけ膨大な研究が蓄積されているにもかかわらず、思想や議論の変遷を100年以上の長期的なスパンで体系的に追いかけたクロノロジカルリサーチは筆者の知る限り存在していない。
単発の文献レビューは存在するが、歴史的なパラダイムシフトの構造にまで踏み込んだ研究は極めて少ないのが現状である。
したがって、増え続ける研究の根底にあるツーリズムにおけるウェルビーイングの在り方の変遷を時系列に整理し、マップ化することこそが、本研究の重要な学術的意義であり、独自性であると示唆する。

3 方法論

Google Scholarを用いて”Well-being”と”Tourism”の文言を含む論文を10年ごとに主要となる論文を5〜6本取り上げて調査を行った。主要論文の判断基準は基本的に論文のランクがSJRにおける指標でQ2以上に掲載されたものかつ引用数が多いものを順に取り上げるものとした。

4 分析結果と各年代の主要参考文献

1930-1950年

観光開発＝経済発展のための手段。（Townend, 1947）

1951-1970年

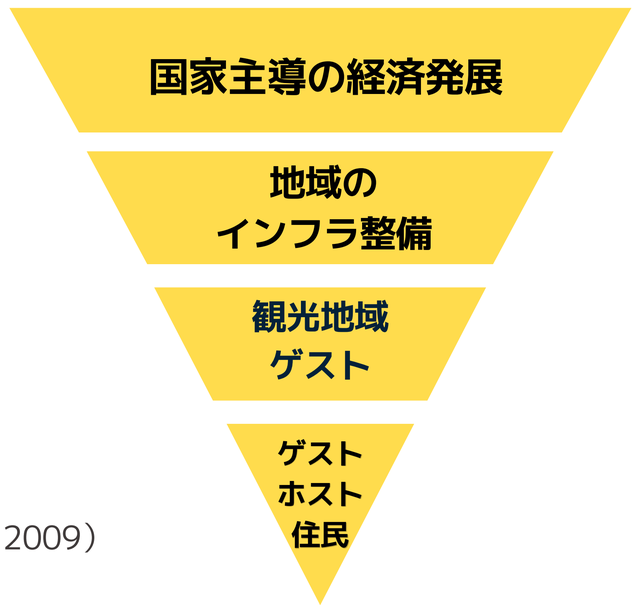
観光開発＝交通網を含めたインフラの整備・投資。
開発の目的が経済発展中心から国家・社会の幸福へと変遷している。（Lickorish, 1957）

1971-2000年

観光が観光客や観光地にもたらすメリット・デメリットについて議論される。(Knetsch, 1976）(Milman,1998)
サステナブルツーリズムの概念が定着した。（Butler, 1999）

2001-2010年

観光が観光客とホスト側の精神的・身体的な幸福に貢献できるかどうか議論される。（Bordas, 2001）（Pearce, 2009）
サステナブルツーリズムについての批判的議論も始まる。（Hardy, 2002）



1930年〜1950年：観光開発は政府主導で実施され、観光開発＝経済発展、すなわち国民と観光客の幸福向上の手段として考えられていた。
1951年〜1970年：ウェルビーイングの対象が国の経済から地域開発へとミクロな視点へと移動し、観光開発とは交通網を含めた地域へのインフラ設備・投資であるという視点が現れ、開発が地域住民と観光客の幸福につながるという考えが議論され始めた。
1971年〜2000年：今まで議論されていなかった観光開発によるデメリットなどが議論されるようになる。観光施設の拡大・開発が地域間の所得格差を生み出す事、観光によってホスト側のウェルビーイングが低下する等の視点が現れた。観光開発を進めていくのではなく、それが持続可能なものでなくてはならないという、サステナブルツーリズムの概念が定着したのはこの時期である。
2001年〜2010年：観光が観光客とホスト側の両者の精神的・身体的な幸福に貢献できるかどうか議論され始めた。また、定着したサステナブルツーリズムの妥当性や現実的な実施の妥当性、という観点からの批判的議論も始まった。

5 研究の成果・限界と今後の展望

本研究の成果は、約140年間にわたるウェルビーイングとツーリズムに関する文献を網羅的に整理し、ウェルビーイングの対象が時代と共に変遷していることを明らかにした点にある。
社会的示唆としては、本クロノロジカルリサーチを通じて、今後の観光市場における主流ターゲットやニーズの予測に示唆を与えられる点が挙げられる。

一方で、研究の限界と課題として、論文の選定基準を引用数に依拠したため、近年の引用数が少ない重要論文を見落としている可能性が考えられる。
また、Google Scholarを用いたことで過去の書誌情報の精度に不確実性が残る。
実際にWeb of Scienceで同様の検索を行ったところ、研究の端緒となる論文がKoh(1996)であるという結果も得られており、より詳細なデータベース間の比較検証が今後の課題である。

6 参考文献・付録